上:ギヨーム・グラファン
下:アルトゥール・シェステリコフ

Photos: E. Kauldhar

11月号の主な記事:『ドン・キホーテ』よりバジルのヴァリエーション

今月号の日本語ページは、人気連載Focus on a Variationの要約版です。オランダ国立バレエ団によるラトマンスキー版『ドン・キホーテ』初演のリハーサルを、マギー・フォイヤーが取材しました。指導するのはギヨーム・グラファン。パリ・オペラ座バレエ学校で学び、ヌレエフ時代に同バレエに入団しました。後にプリンシパルとしてモンテカルロ・バレエ団に移籍し、さらに1988年にミハイル・バリシニコフに招かれてアメリカン・バレエ・シアターへ。同団で17年間活躍しました。教わるのはロシア出身のアルトゥール・シェステリコフ、ペルミ・バレエ学校から同バレエ団を経て2007年にオランダ国立バレエに入団し、今年ソリストに昇格しました。

マギー(MF):最終幕のバジルのヴァリエーションは、バレエ全体の中でどんな位置づけなのでしょうか?技術の見せ場でもありますね?
グラファン(GG):最初の二つの幕は話のつながりがあり、他の役とのからみも多いのですが、最終幕はそこから独立しています。ダンサーはここまでくるとヤマ場のほとんどを終えていて、プレッシャーから解放されて楽しんで踊ることができます。ヴァリエーション自体に何か意味があるわけではなく、結婚式の場面といっても踊るための口実のようなもの。スタイルも、スペイン風とはいえバレエ用にアレンジされたものです。

MF:それでも、役柄を膨らませていくことはできるのでしょうか?
GG:もちろんです。その時全力で踊りきったと思っても、経験を積んでいけば役作りには必ず進歩が見られます。今回のアルトゥールのように優秀で意欲的なダンサーなら、いろんなやり方を試しながら、いちばん自分らしい表現を探っていくといいですね。バジルとキトリはいつもちょっかいを出しあっている恋人たちですから、単なる超絶技巧ではなくお茶目な感覚を足すと、とても楽しくなります。

MF:ヴァリエーションとしては、これはとても難しいのですか?
GG:ええ、でももっとキツい作品もありますよ。たとえばロミオはパートナリングの負担が大きく、疲れ切ったままソロに突入するとか。バジルが本当に大変なのは、ノンストップで役柄を演じるエネルギーの必要な第一幕でしょう。でも、だからこそ身体が温まったままでいられ、グラン・パ・ド・ドゥが踊りやすいともいえます。
若手にまず教えるのは、どこで息を継ぐか。じゃないと、ヴァリエーションの間ずっと息を止めたままになってしまいますからね!もちろん全幕だと合間に休めるところもあり、苦しい一方ではありません。健康で、観客の前で心臓が破れるほど踊りたいなら、これです。『ドン・キホーテ』は心の底から楽しんで踊れるバレエです。アルトゥールには、役の要求するレベルまで力を引きあげるいい機会でしょう。跳躍や回転、ユーモアのセンスなど、一流のダンサーにとっても難しい役ですが、自信を持って本番に臨めるよう技術を高め、役作りをしてほしい。

MF:ダブル・ターンの後のフィニッシュでは、いろいろな方法を示していましたね?
GG:最初のやり方では全身の調和がとれなかったんです。一つのステップにこだわらずいくつか身につけていれば、最後は必ず決められるという安心感にもつながりますしね。

MF:今回がバジル役のデビューとか?
アルトゥール(AS):はい、ラリッサ(・レジュニナ、同団のプリンシパル)のリハーサルの相手を代役で何度か務めたことはありましたが、本番の舞台は初めてです。大好きな作品でチャンスをもらえ、とてもうれしい。じつはこれまでコンクールでも、ヴァリエーションもパ・ド・ドゥも一度も踊ったことがなかったので、本当に楽しみです!

MF:あなたにとって、このヴァリエーションの最大のポイントは?
AS:途中で"死んで"しまわないこと!高度なステップを正しく行うためには、最後まで頭を働かせていなくてはならないんです。一分半の短い踊りだけど展開が速くて、息つく暇もない感じです。しかも、舞台の上では常に魅力的で、上機嫌で、踊りを楽しんでいるバジルになりきらなくてはいけないのが難しいです。

MF:リハーサルの間、ギヨームからは動きのタイミングを常にチェックされていましたね?
AS:音楽に合わせれば楽に踊れるし、ステップによっては、そうしないと正しく行えないものさえあります。正確なタイミングで常に音楽と一体になって踊るのは、本当に大事なんです。

(訳:長野由紀)